

3 人の女性によるフランス革命の記録

ロラン夫人、カルメル会マリー修道女、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人

中里 まき子

序 —— 記憶の分裂を超えて

ロラン夫人、カルメル会・受肉のマリー修道女、そしてラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人。この3人は、フランス革命の記録を書き残した点で共通しているが、革命に対する立場は異なっていた。大別すると、ロラン夫人は共和主義者であり、革命を推進した側に、一方、カルメル会のマリー修道女とラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人はカトリック・王党派、すなわち旧体制側に位置づけられる。

革命後も対抗関係にあった共和派（革命側）とカトリック・王党派（旧体制側）は、革命について、それぞれ異なる記憶を継承した。

まず、共和派にとってフランス革命は、腐敗した王政を倒し、自由で平等な市民を誕生させた偉業であり、19世紀を通して、その記憶は共和国を文化的に統合する参照軸となった。その際、ダントンらと並んでロラン夫人もまた、革命に身命を賭した英雄として崇敬を集めた。一方、旧体制側のカトリック・王党派は、革命期に受けた迫害や、革命への抵抗の記憶を継承した。そこでは、「革命の敵」として処刑された聖職者、修道士、修道女たちや、ヴァンデ戦争で共和国軍と戦い、落命した王党派戦士たちが英雄視された。

このように、ある史実についての記憶の形成が立場によって異なり、記憶が分裂することは、特に20世紀の世界大戦の記憶について指摘され、具体的な検討がなされてきた。

例えば、ファン・デル・クナーフ編『ホロコーストを暴く：映画『夜と霧』の国際的受容¹』は、アラン・レネ監督映画『夜と霧』（1955年）の受容に見られる国ごとの相違を研究することにより、映画の主題であるナチス収容所やユダヤ人迫害に関する記憶の形成が、国によっていかに異なるかを浮き彫りにしている。また、アネット・ヴィヴィオルカは『証言者の時代』において、ユダヤ人作家エリ・ヴィーゼルがアウシュヴィッツでの体験等を綴っ

¹ Ewout van der Knaap (ed.), *Uncovering the Holocaust: The International Reception of Night and Fog*, New York City, Wallflower Press, 2006.

た回想記のイディッシュ語版『そして世界は黙っていた』（1956年）とフランス語版『夜』（1958年）を自ら執筆した際、語り方や内容を変えたことに着目している。両テキストを詳細に比較したナオミ・サイドマンの研究を参照しつつヴィヴィオルカは、「イディッシュ語版は同一のエピソードを語る場合でも、若い生還者たちの〔フランス語版とは〕異なる精神状態を表現しており、その精神状態とは、ドイツ人に対する「暴力や残酷さ、そして新たな敗北者を辱める欲求」を示すものであると指摘する²。これは、イディッシュ語版を読むユダヤ人と、フランス語版を読む非ユダヤ人とで、同じ過去の捉え方が異なっており、それを踏まえた作家が、対象となる読者に応じて伝える内容を変えたことを分析した事例である。

ところが、フランス革命に関しては、共和派とカトリック・王党派が異なる記憶を継承したことは当然であるとしても、どう異なるかを具体的に検証する試みは積極的になされてこなかった。大きな傾向として、革命を推進した共和派側の記憶がフランスの国民史において主要な位置を占め、社会における一般的な革命観となっており、そこからは旧体制側の視点はほぼ排除されてきた。アンドレ・サラザンは1984年にラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人回想録の新版を刊行した際に、一般にヴァンデ戦争がフランス人によく知られておらず、歴史教科書でも詳述されないことの理由を序文においてこう述べる。

このように教科書が〔ヴァンデ戦争を〕語らないことについて、私は理由を探るべきだと思う。その理由とは、私たちが次のように要約できる信条に基づいて生きていることである。1789年以前には、専制政治、飢饉、そして迷信。1789年以後には、自由、平等、博愛³。

革命によって専制政治、飢饉、迷信が去り、自由、平等、博愛が生まれたとする考え方に立脚すれば、反革命の旗印のもと戦ったヴァンデの反徒たちは「時代遅れの哀れな人々⁴」とみなされ、歴史の闇へと葬られることになる。

そこで本稿では、共和派だけでなくカトリック・王党派も視野に入れて、革命の記憶が継承された状況を大局的に捉える試みの端緒として、3人の女性による手記を読み比べたい。すでに指摘したように、各陣営はそれぞれに、

² Annette Wiewiorka, *L'Ère du témoin* [1998], Paris, Plon, 2013, p. 57.

³ André Sarazin, « Introduction », in Marquise de La Rochejaquelein, *Mémoires*, édition présentée et annotée par André Sarazin, Paris, Mercure de France, 1984, p. 9.

⁴ *Ibid.*, p. 22.

革命に殉じた人々を英雄視しつつ革命の記憶を継承したが、3人の女性たちは、当事者あるいは目撃者として、そういった人物たちの記録を書き残し、記憶の継承において決定的な役割を果たした。

まず、ジロンド派内閣の内務大臣ロランの妻、ロラン夫人（1754～1793年）は、同派の黒幕と見なされていたため、モンターニュ派との主導権争いに敗れると、1793年6月1日に政治犯として投獄された。そして同年11月8日に処刑されるまで、約半年間の獄中生活を通して回想録を書き続けた。それは、革命期の諸事件や人間模様を記録した「革命史覚書」、自身の生涯を幼年期から回想した自伝「私的回想録」、死に臨む覚悟を記した「最後の断想」等である。ロラン夫人獄中記は19世紀を通して版を重ね、スタンダールらによって高く評価された。また彼女の生涯はミシュレ『フランス革命史』（1847～1853年）やラマルチヌ『ジロンド党史』（1847年）をはじめ、複数の演劇、絵画、彫塑等の題材となった。

一方、革命期の反カトリック政策に抗して信仰を貫いたために、1794年6月22日に逮捕され、7月17日にパリでギロチンにかけられたコンピエーニュ・カルメル会の16人の修道女に関しては、偶然により逮捕と処刑を免れた同会の受肉のマリー修道女（1761～1836年）が記憶の継承者となる。恐怖政治を生き延びた彼女は復古王政期の1823年、再建されたばかりのサンスのカルメル会に身を寄せ、1832年以降に、殉教した16修道女の生前の言行や処刑時の模様を書き記した⁵。その手記は1836年1月にマリー修道女が没した後、修道院長クレマン・ヴィルクール神父によって編纂され、『1794年7月17日に処刑されたコンピエーニュ・カルメル会修道女のお話』として刊行された⁶。16修道女は1906年に列福され、その後、ゲルトルート・フォン・ルフォールの中編小説『断頭台の最後の女』（1931年）等の着想源となった。

そしてヴァンデ戦争（1793～1794年）で没した反革命軍の戦士たちについては、彼らとともに戦地を巡ったラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人（1772～1857年）が記録を書き残した。ヴァンデ軍の指揮官のひとりであった最初の夫ルイ・ド・レスキュール侯爵が1793年に銃弾に倒れた後、未亡人となった彼女は農家に身を隠して戦乱を生き延びた。1797年から1799年にかけて、王党派への迫害を逃れるべくスペインに滞在し、そこで手記の執筆を開始する。

⁵ William Bush, « Avant-propos », in Sœur Marie de l'Incarnation, *La Relation du martyre des seize Carmélites de Compiègne*, les documents originaux inédits publiés par William Bush, Paris, Éditions du Cerf, 1993, p. 45.

⁶ *Ibid.*, p. 29.

帰国後、1802年に、やはりヴァンデ戦争を指揮して落命したアンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭の弟ルイと再婚し、翌1803年に手記を完成させた⁷。ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人のヴァンデ戦記は1814年に初版が刊行されて以来、最も信頼される記録として読み継がれた。2010年に歴史家アラン・ジェラルドにより最新版が刊行された。

以下では、革命側と旧体制側との境界を踏み越えて、3人の女性による証言を読み比べていく。まず、フランス革命に対する各自の立ち位置がわかる箇所を読んでみよう。

革命について

1789年に革命が勃発すると、ロラン夫人は夫とともに第三身分の闘争に強く共感する。彼女はその時の心境を次のように記している。

革命が突発して、私たちの心を燃え立たせた。人類の友であり、自由の賛美者である私たちは、それが人類を生まれ変わらせ、私たちが実に頻繁に同情してきた哀れな階級の貧困を根絶すると信じた。私たちは革命を熱狂して迎えた⁸。

革命勃発当時アミアンに住んでいた夫妻が1791年2月にパリで居を構えると、ロラン夫人のサロンにはジャコバン派の議員やジャーナリストが集う。その後、1792年3月にジロンド派内閣が成立し、ロランは内務大臣を務める。やがて同年9月に9月虐殺が起きると革命の暴力に幻滅し、翌年には党派間の覇権争いに破れて排斥されるが、それでもロラン夫妻は革命を推進した立役者であったと言える。

一方、後のラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人、マリー＝ルイーズ＝ヴィクトワール・ド・ドニサンは王家に仕える貴族の子であったため、革命を脅威と捉えた。バスティーユ牢獄襲撃が起きた1789年7月14日、ヴェルサイユ宮殿に住んでいた17歳の彼女は、知り合いのボンソル伯爵が、「帰りなさい。パリの民衆が蜂起してバスティーユを占拠したぞ。彼らはヴェルサイユに向かっていているらしい⁹」と言うのを聞いて怯えて帰宅する。そして同年10月5

⁷ André Sarazin, *op. cit.*, p. 26.

⁸ Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, édition publiée avec des notes par C. A. Dauban, Paris, Henri Plon, 1864, p. 177. [Elibron Classics Replicaの複写版を参照]

⁹ Marquise de La Rochejaquelein, *Mémoires*, édition présentée et annotée par André Sarazin, Paris, Mercure de France, 1984, p. 70.

日には実際にパリの民衆がヴェルサイユ宮殿に押し寄せる。早朝からムー
ンの森に狩りに出かけていたルイ 16 世が帰宅途中で捕縛される一方、宮殿に
いた約 2,000 人の貴族は呆然として全ての扉を閉める。マリー＝ルイーズ＝
ヴィクトワールは貴婦人たちとともに窓から庭園を覗き込み、パリの暴徒た
ちを初めて目にする。

[…] 600 人程の男、女、そして特に女の服を着た男がアーム広場にいた。彼ら
はぼろを纏い、ある者は鎌で、他の者は槍で武装していた。彼らは 2 つの小さ
な大砲を引っ提げ、「パンを！」と叫んでいた¹⁰。

翌日、マリー＝ルイーズ＝ヴィクトワールら貴族たちは、パリに連行され
る国王一家とともにヴェルサイユを後にする。やがて 1793 年 3 月にヴァンデ
戦争が勃発すると、彼女が 1791 年に結婚した夫ルイ・ド・レスキューール侯爵
や父ドニサン侯爵も参戦し、革命軍と戦うことになる。

そしてコンピエーニュ・カルメル会の修道女たちの生活も、革命によって
一変する。革命政府の決定により 1792 年 4 月に平服の着用を義務づけられ、
同年 9 月には修道院から追われて、コンピエーニュ市内の 3 ヶ所の住居に分
かれて暮らすことを余儀なくされるからである。それでも彼女たちの革命の
捉え方は、ヴェルサイユの貴族たちとは大きく異なる。マリー修道女は手記
において、リドワヌ院長の革命に対する考えを次のように記している。

修道院から出たことは、彼女 [=リドワヌ院長] の生活様式をまったく変化
させなかった。それどころか彼女は、教会とフランスとを荒廃させる惨禍に、
彼女の苦行の行為を可能であれば増やすための新たな理由を見出していた。彼
女はしばしば、聖テレジアが修道院改革の際に自ら定めた目標を私たちに提示
することを好んだ。そしてある日、その件について熟考した末に彼女に浮かん
だ考えを私たちに告白した。それは、神の怒りを鎮め、その最愛の息子がこの
世にもたらした神の平和を教会と国家とに回復するために、修道女たちが生贄
として身を捧げる奉献の誓いを立てるという考えである¹¹。

旧体制を守るために革命軍と戦火を交えたヴァンデ軍とは異なり、カルメ
ル会修道女たちは、教会と国家とを荒廃させる革命が起きたことについて、

¹⁰ *Ibid.*, p. 76.

¹¹ *Sœur Marie de l'Incarnation, La Relation du martyre des seize Carmélites de Compiègne*, les documents originaux inédits publiés par William Bush, Paris, Éditions du Cerf, 1993, p. 122-123.

自分たちにも責任があると感じる。そしてこの惨禍の背後にある神の怒りを鎮めるべく、自分たちが殉教することを受け入れる。

王家について

続いて、3人の女性の手記においてルイ16世をはじめとする王族がどのように描かれているかを見てみたい。

1792年9月に王政が廃止される以前、ジロンド派内閣によって立憲君主制の確立が模索された。当時、ロラン夫人は、ルイ16世という人物について内務大臣の夫ロランとは異なる評価を下していた。彼女は、「ロランとクラヴィエールが3週間にわたって国王の態度にほぼ満足して、その言葉を信頼し、今後の事態の見通しをお人好しのように飲んで¹²」いる一方で、次のように、国王が憲法を受け入れ、立憲君主制が成立することなどありえないことを看破していた。

私は、専制主義のもとで生まれ、その実践のために育てられ、しつけられた王の立憲的な使命というものを決して信じてはできなかった。自分の権力を制限する憲法を心から望むためには、ルイ16世は庶民よりも精神的に遥かに優れた人物でなくてはならなかった。そして、もし彼がそのような人物であったなら、憲法をもたらすこととなった諸事件が出来るままにはしなかっただろう¹³。

このようにロラン夫人はルイ16世に対して醒めた眼差しを向け、内務大臣の夫以上に状況を冷静に考察している。

一方、コンピエーニュ・カルメル会の修道女たちは、コンピエーニュに王家の城があったことから、しばしば王族たちの訪問を受け、交流する機会を得た。マリー修道女は、ルイ15世の妻マリー・レクザンスカを修道院に迎えた際の思い出や¹⁴、裕福ではない家庭に育ったリドワヌ院長が修道女となるために要した持参金を、当時の王太子妃マリー・アントワネットが支払ったことなどを記している¹⁵。

そして、後のラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人、マリー＝ルイーズ＝ヴィクトワールと、最初の夫レスキュール侯爵の人生は、王家とより本質的な関わ

¹² Madame Roland, *op. cit.*, p. 240.

¹³ *Ibid.*, p. 240-241.

¹⁴ Sœur Marie de l'Incarnation, *op. cit.*, p. 142-143.

¹⁵ *Ibid.*, p. 80-81.

りを持つ。1792年2月、投獄や処刑の危険を避けるために亡命した多くの貴族同様、マリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールは夫とともに亡命を計画していたが、王妃マリー・アントワネットからフランスに留まるよう求められる。

翌日、私はトゥールゼル夫人宅を訪れた。王妃様がマダム・ロワイヤル¹⁶とともに入ってこられ、私に近づいて手を強く握りながら小声でおっしゃった。「ヴィクトリーヌ、あなたには残っていただきたいわ」。私は、はい、とお答えした。彼女はさらに手を締めつけて、ランバル夫人とトゥールゼル夫人に話しに行かれた。まず私のことをお話しになられて「ヴィクトリーヌはパリに残ります」と繰り返された。私に聞こえるくらい大きく¹⁷。

マリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールがこの出来事を夫レスキュールに伝え、彼は亡命せずにフランスに残り、王のために身命を捧げる決意をする（「何よりも王に従うこと。それでもし私が犠牲になっても、少なくとも自分に対して答めることは何もないだろう¹⁸」）。

ヴァンデ戦争を戦った王党派の貴族たちは、ルイ16世やマリー・アントワネットのために犠牲となることを厭わなかった。だからこそ、1793年1月21日の国王の処刑は彼らに堪え難い苦痛を与えた。

しばらくして国王が死去した。ラ・ロシュジャ克蘭氏とレスキュール氏は、国王を救う計画があれば即座にパリに向かうため、知らせてくれるよう友人たちに頼んでいた。しかし何もなかった。この犯罪〔＝国王の処刑〕を知って私たちが感じた苦しみを描くことは不可能である。数日間、家中が涙に暮れていた¹⁹。

その後、同年10月16日に王妃が処刑され、その報がヴァンデにもたらされるが、マリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールは10月15日に戦場で致命傷を負った夫レスキュールに王妃の死を伝えることができない。彼女は、11月2日にレスキュールが遂に王妃の死を知った際の絶望を次のように記している。

私たちは11月2日にラヴァルを発ち、メイエンヌで夜を明かした。道中レスキュール氏は、私がそれまで彼に隠してきた知らせを受けた。馬車が停まると、

¹⁶ マダム・ロワイヤルはブルボン朝のフランス王族の称号のひとつ。ここでは王妃の娘のこと。

¹⁷ Marquise de La Rochejaquelein, *op. cit.*, p. 93.

¹⁸ *Ibid.*, p. 94.

¹⁹ *Ibid.*, p. 120.

誰かが隣で王妃の死の詳細を含む新聞を大声で読み始めた。彼がどれほど王妃に忠実であったかわかっている。彼は叫んだ。「なんと、怪物たちが王妃を殺した！ 私は彼女を解放するために戦っていた。もし回復したら彼女の復讐のために戦おう。容赦はしまい！」このとき以来、日夜、彼は王妃の死のことしか話さなかった²⁰。

ロラン夫人の醒めた眼差しと比較して、ルイ 16 世とマリー・アントワネットに対するマリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールやレスキュールの純粋な崇拝は、時代の流れによって否定されてもやむをえないように思われる。彼らはアンシャン・レジームの身分制のもとで特権を享受していた貴族であり、大多数を占める第三身分の窮状に無自覚であった点では、国王夫妻と同様であった。

それでも、致命傷を負ったレスキュールに王妃の死を隠すというマリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールの心遣いは、時代を超えて共感を呼ぶものである。そしてこの 2 日後、11 月 4 日にレスキュールが息を引き取ると、人々は彼女に夫の死を隠そうとする（「誰もがレスキュール氏の死を知っていたが、私に話す勇気がなかった²¹！」）。同様に、マリー＝ルイーゼ＝ヴィクトワールの父が没した際も、人々は彼女に知られないようにする（「彼女は私たちに父の死を知らせないままであった。私たちには便りがなかった²²」）。

このような「人間」の普遍的な姿は、革命と反革命という立場の相違を超えて、3 人の手記の随所から浮かび上がってくる。つまりフランス革命とは、表（革命側）から見ても、裏（反革命側）から見ても、人間のドラマなのである。

以下では、3 人の女性がいずれも、死者たちの生きた証を残し、記憶を継承するためにエクリチュールに取り組んだ点に着目していく。

死者たちの生きた証

3 人の女性は、革命や王族に対する立場は異なるものの、手記を書き残した動機は一致している。それは、革命において非業の死を遂げた者たちの生きた証を残し、その記憶を後世に伝えることである。

²⁰ *Ibid.*, p. 306.

²¹ *Ibid.*, p. 308.

²² *Ibid.*, p. 391.

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人は、執筆の動機を「私の子どもたちへ」と題した但し書きに明記している。

私が、あなたたちが生まれるずっと前に書き始め、20 回も断念したこの回想録を書き上げる熱意を持ちえたのは、私の子どもでもあるあなたたちのおかげです。私は、あなたたちの祖先の生と死の輝かしい詳細を語るという悲しい歓びを得ました。彼らが尊敬を集める理由となった主たる行動は、他の本からでも知ることができるでしょう。でも私は、あなたたちの母によって書かれた明快な文章は、彼らの名誉ある記憶に対して、より優しく、より孝行心のある気持ちをあなたたちに掻き立てると思いました。私はまた、彼らの勇敢な戦友たちに敬意を表する義務もあると感じました²³。

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人は、最初の夫レスキュール侯爵との間に 3 人の子があったが、3 人とも戦中あるいは戦後すぐに亡くなった。その後、再婚したルイ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭侯爵との間には 8 人の子が生まれた。彼女はこの子たちに、ヴァンデの戦士たちがどのように戦場で散ったかを伝えたいと考えた。また彼女は、手記の執筆には死者たちを弔う意図もあることを記している（「私がこの回想録を書こうと決意したのは、多数の寛大な戦士たちの墓に花束を捧げるためである²⁴ [...]」）。

だからこそ彼女はできるだけ多くのヴァンデの戦士たちに言及しようとするが、やはりこの手記において中心となるのは、当時の夫ルイ・ド・レスキュール侯爵の戦死である。1793 年 10 月 15 日にトランブレイの戦闘で致命傷を負ったレスキュールは、18 日に担架に乗せられてロワール川を渡った後、11 月 4 日に息を引き取る。その 3 日前、夫人が夫から言葉をかけられる場面は、彼女の手記において最も感動的な箇所となっている。

「[...] 私は致命傷を負ったと最初からわかっていた。今はもうそのことを疑わない。私はお前のもとを去る。惜しむとすれば、お前のことと、陛下を玉座にお戻しできなかったこと。特に、幼な子連れ、身籠ったお前を内戦中の軍隊に残していくことが辛い。逃げなさい。変装して、イギリスに辿り着くよう努めなさい」。私が泣き崩れるのを見ると彼は言った。「お前の苦しみを思う時だけ、私は自分の命が惜しい。自分のためなら私は穏やかに死んでいく。確かに私は罪を犯した。しかし私は、自分の良心が乱れたり、自責の念を覚えたりするようなことは何もしなかった。常に敬虔に神に仕え、神のために戦った。私は神の慈悲に期待している。私はしばしば死を間近に見た。それを恐れはし

²³ *Ibid.*, p. 37.

²⁴ *Ibid.*, p. 46.

ない。私は自信をもって天国に行く。お前のことだけが心残りだ。お前を幸せにしたかった。もし思いやりに欠けることがあったなら、許してほしい」。彼は穏やかな顔で話していた。すでに天国にいるようであった²⁵。

こうして命を落とした夫レスキュールの生きた証を残すことが、夫人を手記の執筆へと誘った主要な動機であったと考えることができる。

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人と比べて受肉のマリー修道女は、執筆の目的などを明示的に書いてはいない。彼女が書き手としての自分の存在を暗示する表現は、わずかに次の箇所に見出される。

もし私が、（幸運にもコンピエーニュの修道院長や修道女たちとともに過ごすことができた 7 年半の間に）彼女たちが実践するのを見ることができた美徳の行為をここで詳細に報告しようとするなら、数冊に及ぶ分量になるだろう。しかしこの務めを遂行するために必要な才能を神は私にお与えにならなかったため、彼女たちひとりひとりの人生と死について簡素な抜粋しか提供することができない²⁶。

マリー修道女は、讃美歌を歌う修道女たちがひとりずつギロチンにかけられる壮絶な殉教の場面を描写し、それは後に複数の文学作品等においても表象されたが、彼女が入念に書き記すのは、ひとりひとりの修道女が自分の死を受け入れ、恐怖心を克服し、立派な最期を迎える姿である。例えばジュリー修道女については、自分の犠牲によってこの世界を救うことができるという前向きな発言を伝えている。

私たちは時代の犠牲者です。この時代と神とを和解させるために命を捧げねばなりません。永遠の幸福が私を待っています！ […] 今日嵐が吹き荒れます。でも明日は、私たちは安息の地にいるでしょう²⁷。

そして十字架のイエス修道女については、その慈悲深い心ゆえに、自分に死をもたらす死刑執行人にも同情を寄せる様子が描かれる。

慈愛の精神はやはり彼女の心に満ちていた。この美徳は深く根を下ろしていたため、悪人たち [= 死刑執行人たち] について彼女はこう言った。

²⁵ *Ibid.*, p. 304.

²⁶ Sœur Marie de l'Incarnation, *op. cit.*, p. 120.

²⁷ *Ibid.*, p. 110.

「哀れで不幸な者たちよ！ 彼らに同情すべきである。なぜなら彼らは盲目となり、自分が何をしているか知らないのだ。私たちに天国の扉を開いてくれる彼らを憎むことができるだろうか？ 祈ろう、彼らのために祈ろう……。神が彼らを憐れみ、慈悲を垂れてくださいますように！ わが友よ、私はあなた方を赦します²⁸」。

十字架のイエス修道女の最期は、ルカによる福音書 23 章において、イエスが自分を十字架につける兵卒たちへの赦しを神に乞う場面と重ねられている。

こうしてマリー修道女は、各修道女が死に臨む姿を丁寧に描き出すが、実のところ彼女は、恐怖政治期のパリに留まることはできなかったため、修道女たちの最期を直に目撃してはいない。彼女は、処刑の目撃者たちから聞いた証言を踏まえつつ²⁹、かつてともに生活した際の修道女たちの言動も考慮に入れて、彼女たちの最期を再構築したと考えられる。マリー修道女が直接の目撃者ではなかったことに加え、そのエクリチュールは同志たちの生きた証を残す試みであるため、多少の理想化が含まれるのは当然であるが、それでもやはり、根拠のない創作とは一線を画するだろう。

このように亡き夫や同志たちの生前の言動と死の場面を描いた 2 人と同様、ロラン夫人もまた、不当に排斥されたジロンド派の仲間ひとりひとりの肖像を記述し、生きた証を残している。しかし、革命の動乱を生き延びたラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人やマリー修道女の場合とは違って、ロラン夫人獄中記において主たる記述対象となる死者 —— 死にゆく者 —— は、書き手自身である。

処刑は免れえないと考えるロラン夫人は、残された時間と戦いながら、自身の存在を後世に伝えるために自伝を執筆する。

芸術家の娘であり、また、大臣を務め、立派な人物であり続けた知識人の妻である私は今、囚われの身であり、おそらく、暴力的な非業の死を逃れられない。私は幸福と逆境を知った。栄光を間近で見たし、不正も被った³⁰。

このように始まる自伝において幼年期からの様々な場面が語られるが、この自伝の中軸をなし、全体に一貫性を与えているのは、20 年ほど前に若くし

²⁸ *Ibid.*, p. 217.

²⁹ マリー修道女の手記には次のような記述がある。「これは目撃者たちが私に断言したことである (*ibid.*, p. 105)」。

³⁰ Madame Roland, *op. cit.*, p. 1.

て病死した母との最後の別れである。1775年6月7日、脳膿瘍のために母が息を引き取った時のことを、彼女は次のように記している。

お母さん……。もはや世を去っていた！ 彼女の腕を持ち上げてみる。信じられない。彼女の眼を開けたり閉じたりしたが、もう私を見ることはない。その眼差しは、あれほど優しく私に注がれていたのに。私は母を呼ぶ。動転して寝台に身を投げる。唇と唇を重ねる。母の唇を僅かに開いてみる。私は死を吸い込もうとする。私の呼吸で死を捕らえて、ただちに死んでしまいたいと願う³¹。

獄中のロラン夫人は構想を練る時間もないままに自伝を書いたが、自分の人生を振り返る彼女の意識は、早い段階から母との死別に向けられる。母の死が最初に想起されるのは、自伝の冒頭で乳母を紹介する場面である。

彼女 [= 乳母] は、残忍な死が私から母を奪い去ったと知ると、私のそばに駆けつけた。今でも私は彼女の来訪を思い出す。私は苦痛のため床に伏していた。彼女の存在は経験したばかりの喪失、人生における最初の悲しみを鮮明に思い起こさせたため、私は痙攣して倒れ込み、彼女を震え上がらせた。彼女は立ち去り、それきり会わなかった。そのすぐ後、彼女は亡くなった³²。

迫り来る自分の死を見据えるロラン夫人は、最愛の母との死別の状況や、その際の自身の心境を思い返し、詳細に書き綴っている。彼女は母の死に重ねながら、前もって自分自身の死を悼んでいるようである。

死の予感とエクリチュール

3人の女性は、愛する人や同志たち、そして自分自身の生きた証を残すために、短期間で膨大な量のテキストを書き残した。彼女たちの手記を横断的に読むことによって浮上するのは、こうしたエクリチュールの試みが、書き手自身の死の意識によって動機づけられていることである。

自分自身の死の予感とエクリチュールとの関係が最も明白なロラン夫人の場合から見てみたい。ロラン夫人は革命後、ルソー『告白』を精神的に受け継ぐ自伝作家として評価されたため³³、彼女の獄中記の多くの版では、自伝

³¹ *Ibid.*, p. 128.

³² *Ibid.*, p. 5.

³³ サント＝ブーズはロラン夫人を「女性版ジャン＝ジャック・ルソー」と捉えている。Sainte-Beuve, « Madame Roland » [1864], *Nouveaux Lundis*, t. VIII, Paris, Michel Lévy frères, 1867, p. 264.

である「私的回想録」が巻頭に収録され、幼年期の回顧から記述が始まる。しかし実際には、1793年6月1日に収監された彼女はまず「革命史覚書」を書き、面会に来た友人に渡して保管を頼んでいた。そして、8月はじめに友人の逮捕に伴いその一部が消失するという苦い経験を通して、自分の死の現実味を直視するようになり、その直後に「私的回想録」を書き始めた。彼女は手記の消失を知った際の心境を次のように述べている。

私は拘留生活の最初の時間を執筆に費やした。私は急いで書いたし、恵まれた状況であったため、ひと月もしないで1冊の12折り本ほどの手稿ができた。「革命史覚書」という標題で、私の立場ゆえに知りえた、公的な出来事に関わるすべての事実と人物の詳細を記した。[…]

最近のことに至るまですべてを書き上げたところだった。私はそれをある友人に託し、彼はそれに高い価値を見出していた。突然、嵐が彼に襲いかかった。逮捕される瞬間、彼は危険のことしか考えず、それを避ける必要のみを感じた。そして、急場しのぎの方策に思いを巡らすこともなく、私の手稿を火に投じた。白状すると、私は自分の身を火に投じてほしかった。この消失は、それまでの最も辛い苦難よりも私を動揺させた³⁴。

牢獄に収監された当初、ロラン夫人は、状況が改善されて自分は必ず解放されると信じていたようで、7月6日のフランソワ・ビュゾ宛の手紙には「状況の好転によって私が解放されることは間違いありません。問題は待つことだけです³⁵」と記している。ところが、友人に預けていた「革命史覚書」を失った後の彼女は、自分に残された時間は僅かであると認識している（「私にはあとどれだけ残されているだろう。祖国の荒廃や、同国人たちの墮落の目撃者となる日々が³⁶！」）。この絶望的な想いこそがロラン夫人を、自分の生きた証である自伝のエクリチュールへと向かわせることになる（「私の「覚書」は失われた。これから「回想録」を書こう³⁷ […]

」）。ロラン夫人ほど差し迫ってはいなくても、マリー修道女もやはり自分の死を意識しつつ執筆したと考えられる。先述のように、革命期を生き延びた彼女は復古王政期の1823年、サンスのカルメル会に身を寄せ、1830年代に手記に取り組んだ。このとき彼女が40年ほど前に殉教した修道女たちの記録を

³⁴ Madame Roland, *op. cit.*, p. 302-303.

³⁵ Lettre à François Buzot, 6 juillet 1793, in Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, publiés par Claude Perroud, Paris, Plon, 1905, p. 356.

³⁶ Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, *op. cit.*, p. 48.

³⁷ *Ibid.*, p. 2-3.

書き始めたことの要因に、70 歳近い高齢となり、死の予感を得たこともあっただろう。実際、彼女は 1836 年 1 月に息を引き取った。

一方、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人の場合、若い時期にヴァンデ戦記を執筆したこともあり、自分の死の予感が執筆自体に影響を及ぼすことはなかったようである。しかし、彼女の手記の第 6 版が 1848 年に刊行された際、それまでの版では省かれていた最初の 2 章を追加する変更をしており、その背後には、書き手自身の死の予感があったと考えられる。彼女が第 6 版に寄せた文章に次の表現が見られる。

私は残りの人生を泣き暮らすことだろう。私は目が見えず、もはや最後の苦しみのお話を口述する力も持たない³⁸。

1814 年の王政復古により、彼女の当時の夫ルイ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭侯爵は元帥となり、ブルボン王家の精鋭部隊の指揮を任された。そして翌年、ナポレオンの百日天下の際に帝国軍の銃弾に倒れた。2 人の夫を戦争で失った彼女は、失意のうちに後半生を過ごすこととなった。ヴァンデ戦記の第 6 版が刊行された 1848 年には、70 歳の高齢に達し、視力も体力も衰え、死を意識していたことだろう。この第 6 版において初めて収録された最初の 2 章に書かれているのは、幼なじみであった最初の夫ルイ・ド・レスキューール侯爵と過ごした幸せな少女時代である。この 2 つの章は、ヴァンデ戦争勃発前の時期を扱っていることから第 5 版までは省かれていたが、死を意識した侯爵夫人はその公表に踏み切った。この決断に、革命前の幸福な時期を含むルイ・ド・レスキューールの全生涯の記憶を後世に伝えたいという彼女の願いを読み取ることができる。

結びにかえて

フランス革命に想いを致すとき、概して、革命を推進した側に気持ちを重ねることが多いだろう。しかし革命の記録を読むなら、革命、反革命の区別を踏み越えることこそが、より豊かな読解へと至る道である。本稿で紹介したロラン夫人、カルメル会マリー修道女、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人の手記は、それぞれ、「共和派」「カトリック」「ヴァンデ」という陣営において革命の記憶の継承に大きく貢献した。3 人の女性は、革命に対して、ま

³⁸ Marquise de La Rochejaquelein, *op. cit.*, p. 44.

た王家に対して、異なる立場をとるが、3 人とも死者の生きた証を残すという目的のもと文章を綴った。彼女たちの手記の比較から、相違点よりむしろ共通点が浮上するようになるのは、立場が違って、書き手たちの経験には共通する部分が多かったからだろう。革命期は、どの陣営、どの党派にとっても等しく大量死の時代であった。

また、革命の記録をどう読むかは、読み手の心性に依存するものでもある。私たちは今、東日本大震災に続く喪の時代を生きているからこそ、革命期の喪失を語るエクリチュールに親近感を持ちやすい。革命のどこに着目し、どう解釈するかは、時代や社会状況によって変化してきた。革命は、人々の心性や社会のありようを映し出す鏡のような役割を今後も担っていくだろう³⁹。

³⁹ 本稿は、日本学術振興会・2020 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C）「ロラン夫人の記憶の継承に関する研究」（課題番号 20K00488 研究代表者・中里まき子）の研究成果の一部である。